千里金蘭大学紀要 7 43－56（2010）

＜原著論文＞

ブックスタートと絵本
― 絵本は子どもにどのように影響するのか 父親の読み聞かせ ―
Bookstart and Picturebooks
― How Picturebooks Work on Children : Reading by Their Father ―

桑名 惠子[1]

要 旨

まっさらな赤ちゃん、乳幼児の心のなかに届く絵本の役割とは何だろうか。最近のわが国における絵本の発展は目ざましいものがある。書店には、絵本のコーナーが設けられ、赤ちゃん絵本、物語絵本、昔話、民話また、しかけ絵本など各ジャンルが充実している。このような絵本ブームの到来には、今まで、多くの先駆者の多大な努力があったことはいうまでもない。とくにわが国の赤ちゃん絵本は質の高い傑作が多いと定評がある。このような絵本界の充実に貢献した戦後の先駆者たちの軌跡を追う。

また、赤ちゃん絵本が注目されはじめたけきっかけを作った英国発祥のブックスタートについてに触れる。わが国では、ブックスタートが、全国レベルで広がっているものの、英国で発祥したきっかけ、背景などはあまり知られておらず、本論文において、それらを明確にし、ブックスタートの本来の意義について検証する。

キーワード ：瀬田貞二、赤ちゃんは絵本が大好き、ブックスタート、シェアーブック、石井桃子
Seta Teiji, Babies Love Books, Bookstart, Share books, Ishii Momoko

1. はじめに

筆者は2006年度千里金蘭大学紀要第２号から、絵本学をテーマに絵本の構造や、絵本を通して見える親子関係などを論じてきた。３号、４号では、とくに、近年の子育て環境の変化に注目し、絵本における親子関係から、父親像を探り、父親の育児参加の重要性を訴えてきた。

今回は、子育て環境の変化から今求められる子育て支援として、取り組まれているブックスタート事業を中心に論じ、改めて、現代の子育て環境のなかで、絵本が子どもに与える影響や絵本のもつ魅力に迫ってみる。また、ブックスタート事業で注目を集めている赤ちゃん絵本についても触れる。

2. 絵本の歴史からみえるもの

2．1 わが国の戦後の絵本の歴史

筆者は、千里金蘭大学紀要第２号で筆者は瀬田貞二の著作「絵本論」[1)]を元に瀬田貞二の絵本観、絵本に対する定義について、述べた。

「絵本学」の研究がさかんになってきた今も、瀬田貞二が提唱した絵本論に注目が集まっている。

その「絵本論」は瀬田貞二が1956年～1976年の間に書いた論文のなかから、没後1985年、絵本に関する文章のみを選んで「瀬田貞二 子どもの本評論集『絵本論』」として福音館書店から出版されたものであった。この『絵本論』のあとがきに1956年に創刊された『こどものとも』を紹介する文章が出版社である福音館書店により、掲載されていて、興味深い。

“1956年といえば、わが国の絵本はその３年前に『岩波の子どもの本』がやっと産声をあげたばかりの全体的には、あまりに貧しく、いまだ戦前のいくつかのすぐれた絵本のレベルにも到底及びがたく、著者のことばを借りれば「着色菓子のようなもの、ピラピラしたもの、けばけばしいもの、おどかすだけのもの、支離滅裂なもの」が横行し、無論評価の基準は定まらず、混乱をきわめている時代でした。”[1)] この文章からわが国の絵本の歴史を垣間見ることができる。

2．2 岩波の子どもの本

瀬田貞二が述べた『岩波の子どもの本』[2)]は、1953年

1 Keiko KUWANA 千里金蘭大学生活科学部 児童学科
受理日 ： 2010年9月1日

に創刊された。『ふしぎなたいこ』、『かにむかし』、『きかんしゃやえもん』、『ひとまねこざる』など民話や創作物語を絵本として発刊された戦後のわが国の草分け的絵本たちといえるだろう。とくに石井桃子・文、清水崑・絵『ふしぎなたいこ』はわが国の戦後の初の絵本であるといわれる。

この絵本はサイズが20.7×16.4と現在発行されている赤ちゃん絵本と同等程度のコンパクトなものである。この岩波子どもの本を見習って、さまざまに赤ちゃん絵本が出版されてきたのではないかと推察する。

確かに、子どもの手に取りやすく、扱いやすいという利点がある。しかし、当時の出版社の記述によると、戦後復旧間もないころ、貧乏から抜け出していなかった国民の生活には、できるかぎり安価な本を作ることが課題であり、またこのサイズは紙の使い方が効率的だったことがわかる。社会全体が生活そのものを復興させることが優先されるなかで、児童文学や子どもの文化を大切にしようとした『岩波の子どもの本』の出版は、画期的な出来事であった。『岩波の子どもの本』に多くの翻訳や執筆をし、貢献した石井桃子が『岩波少年文庫』のあとがきで次のように述べている。

“物も残さず焼きはらわれた街に、草が萌えだし、いためつけられた街路樹からも、若々しい枝が空に向かって伸びていった。戦後いたるところに見た草木のあのめざましい姿は、私たちに、いま何を大切にし、何に期待すべきかを教える。未曽有の崩壊を経て、まだ立ち直らない今日の日本に少年期を過ごしつつある人々こそ、私たちの社会にとって、正にあのみずみずしい草の葉であり、若々しい枝なのである。この文庫は、日本のこの新しい萌芽に対する深い期待からうまれた。この萌芽に明るい陽光をさし入れ、豊かな水分を培うことがこの文庫の目的である。幸いに世界文学の宝庫には、少年たちの温かい愛情をモチーフとして生まれ、歳月を経てその価値を減ぜず、国境を越えて人に訴える、すぐれた作品が数多く収められ、また、名だたる巨匠の作品で、少年たちに理解し得る一面を備えたものも、けっして乏しくない。私たちは、この宝庫をさぐって、かかる名作を逐次、美しい日本語に移して、彼らに贈りたいと思う・・・”[2)]

この文章は、戦後の日本において、当時の出版社をはじめ、児童文学者や絵本作家たちがどれほどの熱い想いで児童文化を広く普及させようと願い、それを実践してきた経過を表しており、興味深い。

その後、『岩波の子どもの本』は、欧米の絵本の翻訳を中心としてさまざまな絵本を出版していく。1954年にマンロー・リーフ文、ロバート・ローソン絵、光吉夏弥訳『はなのすきなうし』、バージニア・リーバートン著、石井桃子訳『ちいさないえ』、1956年、フランソワーズ著、与田準一訳『まりーちゃんのひつじ』、1959年、木下順二著、清水崑絵『かにむかし』、1976年、グリム著、バーノディット・ワッツ絵、生野幸吉訳『赤ずきん』、1980年マージョリー・フラック著、大沢昌助絵、光吉夏弥訳『おかあさんだいすき』など、創作や民話、昔話の絵本化を精力的に行ってきた。この『岩波の子どもの本』の出版に伴い、子どもの絵本の関心が高まっていく。このような状況下で、福音館書店が画期的な絵本を刊行する。これが『こどものとも』である。『こどものとも』は、一作一冊の物語絵本を月刊として、刊行するものである。

２．３ 福音館書店「こどものとも」

1956年、当時としては類のない物語絵本を毎月発刊するという『こどものとも』シリーズが福音館書店から創刊された。

当時は、前述の瀬田貞二のことばを借りれば、着色菓子のようなピラピラしたもの、けばけばしいものつまり、名作物語のダイジェスト版絵本や、おもちゃがわりのかわいい動物絵本や乗り物絵本が書店に並んでいた。

一方、幼稚園、保育所では、直接販売として、『キンダーブック』、『チャイルドブック』、『ひかりのくに』など園児の家庭に直接届くというスタイルの保育絵雑誌が発刊され、社会的に、子どもへの情操教育への関心が高まってきていた。そうしたなかの『岩波の子どもの本』の出版であった。『岩波の子どもの本』は、前述したように欧米の物語絵本の翻訳を中心に出版し、わが国の児童文学界に新風を吹き込み、欧米の絵本作家の描いた絵本の醍醐味や素晴らしさを体験する人が増えていった。この『岩波の子どもの本』の精神を保育絵雑誌に盛り込み、多くの子どもたちに、物語絵本を届けたいと思い立ったのが、福音館書店で当時編集の仕事に就いていた松居直である。『こどものとも』という月刊絵本の誕生の瞬間であった。『こどものとも』は毎号ごとに一つの物語に一人の画家が絵を描くというスタイルで、ペーパーバック版で出版された。

松居直は、1956年４月、『ビップとちょうちょ』与田準一作・堀文子絵を創刊し、以後毎月１冊、物語絵本を世に出してきた。彼の著作『絵本とは何か』[3)]によると『こどものとも』創刊号から150号まで彼が直接編集したという。

ちなみに『こどものとも』は現在も続いており、2006年で600号を越えるという長い歴史をきざんできた。現在では、絵本の定番として、多くの子どもや親や保育関係者に読み続けられている。現在でも人気の衰えない絵本、なかがわりえこ作、やまわきゆりこ絵『ぐりとぐら』のシリーズや加子里子作・絵『だるまちゃんとてんぐちゃん』シリーズ、筒井頼子作、林明子絵『はじめてのおつかい』なども始めての出版はこの『こどものとも』であった。

このように松居直は『こどものとも』の編集、出版をとおして、わが国の児童文学や絵本界の代表する作家や画家を見出し、成長させ、絵本界を盛り立てた。この功績はとても重要なものであるといえる。

筆者が保育現場で保育士として勤務していたとき、この『こどものとも』を保育室でよく活用した。

担当したクラスの子どもたちに絵本の読み聞かせをする。なかのひろたか作・絵『ぞうくんのさんぽ』、加子里子作・絵『だるまちゃんとかみなり』、わたりむつこ作・絵　中谷千代子『いちごばたけのちいさなおばあさん』、ささきまき作・絵『やっぱりおおかみ』などはとくに子どもたちのお気に入りであった。
親の希望により、保育所で定期購読に取り組んだ経過もあり、子どもたちは保育室で慣れ親しんだ絵本を家庭でも親から読み聞かせをしてもらえるという利点があり、絵本がどんどん子どもたちの世界に浸透していった時代であった。初版が『こどものとも』であり、その後子どものとも傑作集としてハードカバーで出版された絵本も多く、1963年に『こどものとも』で出た『たろうのおでかけ』も傑作集として出版され、３歳児クラスでは、年度末に実施する生活発表会の劇あそびにも発展した。

個人的な好みで、今でも記憶に残っている絵本も多い。1974年に発行された松野正子作・荻太郎絵『こうさぎのクリスマス』、なかがわりえこ作・やまわきゆりこ絵『ぐりとぐらのかいすいよく』、1976年ルース・エインスワース作・石井桃子訳・堀内誠一絵『こすずめのぼうけん』、1977年、谷川俊太郎作・長野重一写真『よるのびょういん』、1977年水沢謙一再話・梶山俊夫絵『さんまいのおふだ』、1980年石川ミツ子作・二俣英五郎絵『くらやみえんのたんけん』、1980年わたりむつこ作・ましませつこ絵『てんさらばさら　てんさらばさら』などは筆者の絵本開眼の書として今も心の奥に納まっている。

２．４　絵本ブーム到来

福音館書店の『こどものとも』の出版に合わせて、出版界はさまざまな出版社が翻訳絵本や創作絵本を出版し、絵本ブームの時代がやってきた。マーシャ・ブラウン作・絵　瀬田貞二訳『三びきのやぎのがらがらどん』（福音館書店）レオ・レオニ作・絵『スイミー』（至光社）、アーロルド・ローベル作・絵『どろんここぶた』（文化出版局）、モーリス・センダック作・絵『かいじゅうたちのいるところ』（冨山書房）、マリー・ホール・エッツ作・絵『うみのおばけオーリー』（岩波書店）ヘルガ・ガルラー作・絵『まっくろネリノ』（偕成社）、ポール・ガルドン作・絵『３びきのくま』（ほるぷ出版）、」ウイリアム・スタイグ作・絵　瀬田貞二訳『ロバのシルベスターとまほうの小石』（評論社）、トミー・アンゲラー作・絵いまえよしとも訳『すてきな三人ぐみ』（偕成社）、加子里子作・絵『おたまじゃくしの101ちゃん』（偕成社）、古田足日作・田畑精一絵『おしいれのぼうけん』（童心社）など、さまざまな絵本が出版され、多くの読者が絵本との出会いを経験している。対象年齢に応じた絵本の紹介も詳しく示され、絵本のベストセラー、定番などの紹介も頻繁に行われるようになった。そして、絵本ブームをさらに盛り上げたのが、イギリスバーミンガムで提唱されたブックスタートである。

２．５　ブックスタート運動の開始

この事業は1992年イギリスのバーミンガム市で起こった。すべての赤ちゃんに絵本を手渡す運動と総称されている。英国では、ブックトラストというチャリティー（公益法人）が推進団体となり、英国のすべての赤ちゃんにブックスタート・パックを手渡すことを目標に運動が広がり、現在では英国の約90％の地域で実施されている。

その中身は、赤ちゃん向けの絵本２冊、赤ちゃん絵本のリスト、イラスト・アドバイス集『Babies Love Books』（赤ちゃんはえほんが好き）、地域の資料、ランチョンマットであり、ブックトラスト独特のくまの親子が絵本を見ているイラストのついたバックに入れられている。

わが国では、2000年の「子ども読書年」推進会議で紹介され、2001年世界で２番目に開始したという経過がある。前項で紹介した松居直が理事長を務める特定非営利活動法人（ＮＰＯブックスタート支援センター）が事務局となり、自治体が実施している。全国統一のモデルがあるわけではなく、運動の理念を共有

しながら、自治体の関係者が連携し、それぞれの地域に根づく運動を広めている。多くの自治体は、母子保健や子育て支援に関わる関係者により、実施するケースが多く、保健センター等で実施されている０歳児健診などで絵本を手渡したり、実際に赤ちゃんに絵本の読み聞かせをしながら、絵本の重要性を啓蒙するなどをしている。2009年では、全国1,798市町村中、712か所の実施が報告されている。

2002年に実施地域を支援し、運動を推進する組織としてＮＰＯブックスター支援センターが設立された。そのホームページに掲載された松居直会長の挨拶文によると活動のキャッチフレーズを「Share books with your baby！（赤ちゃんと絵本を介して楽しいひとときをわかちあおう）」として取り組まれた。ＮＰＯブックスタートは、英国の推進団体ブックトラストとの協力のもと、この理念の普及を図りながら、各国の活動の推進団体と連携し、情報を共有するとともに日本の取り組みを世界に発信している。

筆者はある自治体で、市の子育て支援施策にかかわる少子化対策を担当した経験がある。ブックスタート事業がわが国に紹介され、少しずつ各市町村で取り組まれていく過程のなかで、その自治体でブックスタートをどのように政策として取り組んでいくかを検討した。議論の中心はブックスタートが子育て支援策として有効なのか、市民への理解、啓発をどう進めるのかという視点であった。結果、保健所、図書館を連携し、推進していくことが決定したが、当時わが国でも、ブックスタートを取り組む先駆的な自治体も少なく、乳児期の子どもに絵本を手渡すことがなぜ子育て支援策になるのかという初歩的な論議したことを刻銘に記憶している。

今からほぼ10年前のことである。ブックスタートについては次章で、詳しく触れる。

３．ブックスタート事業

３．１　英国でブックスタートがなぜ起こったのか。

ここでは、第２節でも紹介したブックスタート事業とあかちゃん絵本について、検証する。ブックスタート事業は前述のとおり、絵本を赤ちゃんに手渡すことにより、子どもが乳幼児期から絵本に親しむ環境を用意できるとして、わが国の多くの自治体も子育て支援策として実施している。しかし、実際なぜこの運動がイギリスのバーミンガム市で発祥したのか、当時のお国事情、当地の状況はどのようなものだったのかについてはあまり知られてはいない。そのころのバーミンガムの実態をはじめ、英国のブックスタートについて、詳細に書かれた書籍が2010年２月に発行された。それが『赤ちゃんと絵本をひらいたらブックスタートはじまりの10年』[4)]である。

この本は、日本のブックスタートの推進団体であるNPOブックスタートが編集し、わが国のブックスタートの取り組みをわかりやすく紹介するものであり、多くの実施団体の実践記録が掲載されており、ブックスタートを学ぼうとする人にお勧めのものである。

本書によると、“ブックスタート発祥の地バーミンガム市は人口約百万人、年間出生数約１万５千人の英国第２の都市である。18世紀に起こった産業革命時にインド、パキスタンなどの南アジア系の諸外国から多くの労働者を送り込み、工業都市として栄えた歴史をもつ。現在は、旧植民地からの移民が多く住む、多文化・多民族社会を形成している。”[4)]とある。

1999年10月に、単独でバーミンガムを訪れ、「ブックスタート」をはじめてわが国に紹介した元ジャーナリスト佐藤いづみ[※1]によると、1992年のバーミンガム市での試験実施のころから継続してブックスタートを担当しているイヴォンヌ・ラケット氏から直接話を聞く機会を得、そのときの印象をこのように語る。

“バーミンガム市は英国のなかでも特に移民の多い多民族社会であり、赤ちゃんが生まれる環境がそれぞれの家庭によって大きく異なることから、ブックスタートがもれなくすべての赤ちゃんを対象にしていることがとても重要なポイントになること、さらにブックスタートを実施していくためには保健や教育、多文化政策といったほかの行政機関との強いパートナーシップ（連携）が不可欠である”と話し、その語り口により、彼女がこの仕事に対して深い情熱と誇りを持っていることを感じ、とくに赤ちゃんとその赤ちゃんを育てている保護者の幸せを心から願う彼女の優しい気持が伝わったという。

イヴォンヌ・ラケット氏の話にあるように、「ブックスタート」は、バーミンガムの多くの市民のなかで、多民族のたとえば文字が読めない両親から生まれた赤ちゃん、単身で子育てをしている家庭など、さまざまな理由で豊かな環境とはいえない状況に置かれた赤ちゃんも多いという背景のなかで、“すべての赤ちゃんを育てる家庭へ絵本を配り、それを通して、小さな赤ちゃんと絵本を楽しむことができることや地域で子育てを応援していること”を実践しているのである。そして、佐藤の訪問後１か月後に「子ども読書年」推

進会議の事務局のメンバーが、正式視察を行うことになる。

「子ども読書年」は、2000年５月に日本初の国立の子ども図書館である「国際子ども図書館」が東京都上野に開館するのを記念して、国会決議で制定された。子どもが本と出会う環境を豊かなものにすることを目標に取り組まれたもので、それを推進する推進会議のメンバーが、前述の佐藤いづみの英国でバーミンガムでのブックスタートの報告を聞き、強い関心をもち、英国への視察団として、派遣されることになったのである。

そのときに、大変興味深いエピソードが紹介されているので、ここで、それについて触れておく。

ブックスタートの発案者であるウェンディ・クーリング氏の話である。ウェンディさんは地域の小学校に入学したばかりの１年生のクラスで読み聞かせをすることになった。英国の１年生は５歳の子が中心なので※2ウェンディさんはそのくらいの年齢の子どもたちが楽しめそうな本を何冊か選んで持っていった。すると一人の男の子がウェンディさんの近くにやってきて、その本を手に取り、とても不思議な行動をしたという。ケビン君というその男の子はまず、本のにおいをくんくんとかぎ、次に本を椅子においてその上に腰をかけ、そして、最後に本の表紙の面を水平にして友達に投げようとした。それをみて、ウェンディさんは、ケビン君は生まれて初めて本を手にしたのではないかと考えた。５歳であれば、絵本の表紙をめくれば、絵が書いてあり、お話が始まることを知っていて、それを誰かが一緒に読んでくれることが楽しくて仕方がないという経験をしているに違いないと思っていたウェンディさんはこの光景にショックを受けた。

彼女は担任の先生に、ケビン君の家庭は本が買えないほど貧しいのかと聞いたところ、ごく普通の家庭であり、たまたま彼のまわりにいた大人が本に興味がなく、一度もケビン君と一緒に本を楽しもうとしなかった結果であるとわかり、ウェンディさんは新たな挑戦に乗り出す。

これまで、地域の図書館で子どもを対象に「おはなし会をやります」と案内すると、常連になった親子が集まってくるが、積極的にそういう場に集まってくる関心の高い家庭と、そういう場に現れない家庭との間に一線があると感じられた。

ケビン君のように、図書館からの情報も届かず、５歳になるまで一度も本を楽しんだことがなかったような家庭が現実にあることから、ウェンディさんは関心のある人にだけでなく、地域に生まれたすべての子どもとその保護者に本を使って親子でとても楽しい時間を過ごすことができるということを伝えるきっかけ作りを始めるのである。

※１　佐藤いずみ
元雑誌記者で、英国のブックスタートに興味をもち、わが国ではじめて、ブックスタートを単独で視察した。その報告書が出版関係者の間で紹介され、「子ども読書年推進会議」で取り上げられ、国レベルでの調査・視察に及ぶこととなる。わが国のブックスタート立ち上げに貢献した。現在は、ＮＰＯブックスタートのアジアネットワーク事業を担当している。

※２　英国の１年生は５歳が中心
イギリスでは、義務教育が5歳からである。実際には、４歳からプレスクールという学校生活をはじめる子どももいる。

３．２　英国のブックスタートの取り組み

バーミンガム市のブックスタートは前述のとおり、絵本と出会ったことのなかったケビン君の事例が源となっている。ウェンディさんはこのケビン君の話を多くのバーミンガム市民に伝えていった。そして、ついに彼女は地区の保健師に出会う。この保健師から、常に気になっていたバーミンガムでの子育ての状況を知ることができたのである。保健婦の言葉は次のとおりである。

“英国では、すべての赤ちゃんの体の健康を対象にした７～９か月児の健診があり、これは、行政の責任として赤ちゃんの体の健康をチェックするために行われてきた。ところが、時代の移り変わりのなかで、現代では、赤ちゃんの栄養面の問題はほとんどなくなり、これからはむしろ赤ちゃんと保護者の心の健康について配慮することが求められてきている。

また、英国では年々離婚率が上がり、一人で子育てをする親が多くなり、ひとり親が仕事と子育ての両立に苦労するなかで、育児に疲れてしまうケースも増えている。それに加えて、15歳前後の若いカップルが子どもを産むケースもあり、子どもの関わり方についてより具体的な子育て支援が求められてきている”[4)]

二人は、それぞれが抱えている問題意識と課題を解決する方法として、地域に生まれたすべての赤ちゃんが対象となる「健診」の場で親子がゆったりと楽しい

絵本の時間をもつことにつながるきっかけづくりの活動をしようと決意する。

それがブックスタートにつながっていく。まず、家に赤ちゃん向けの絵本が１冊もない家庭もあるだろうと考え、家に帰ってからすぐに始められるように、絵本そのものを無料で手渡すことを決めた。忙しい育児のなかで読み聞かせをするために図書館や本屋に出向き、絵本を選ぶなど余裕のある人はそう多くないと考え、“絵本をプレゼントする”ことをブックスタートの大切なポイントにする。

しかし、ただ本をプレゼントするだけでは、自分で字が読めるようになるまで、絵本が本棚にしまっておかれたり、早期教育の道具にされてしまう恐れがある。では、どうすればよいか。その方法が赤ちゃんと絵本を楽しむ体験である。つまり、乳児を育てる保護者に赤ちゃんがどのように絵本を楽しむかその実際をみてもらい、自分もできるかな、やってみたいなという気持ちを醸成することであった。本をプレゼントすることが50％、赤ちゃんと絵本を楽しむ体験が50％で両方合わせて、赤ちゃんとともに絵本に親しみ、赤ちゃんと読んでいる人が共にあたたかい気持や楽しさを共有する時間を生みだすのでないかという結論に至ったのである。[4)]

３．３　ブックスタートの教育的効果

ブックスタートの発祥の契機は、前項で述べたとおりであるが、忘れてはならない英国自身のもつ事情も大きい。

英国への視察団がバーミンガム市のアストン地区の健診で目にしたブックスタートの現場の光景は印象深い。参加していたおよそ10組のすべてが南アジア系の親子であったと視察団は報告している。[4)]視察団はブックスタートの対象は、典型的な英国の親子が相手であると予想していたが、そこで目にしたのがすべてアジア系の親子だったという事実に驚かされる。そのアジア系の親子にブックスタートとして用意したパックを手渡していたという。それほど英国には、多民族が暮らしており、このブックスタートは、その地区に住んでいるすべての人を分け隔てなく対象にし、進められているということが立証されている。彼らのなかには、母語しか話せない人も多い。そこで、英国では、英国社会全体の課題として、識字問題が生じてくる。

ブックスタートを担当する職員には、保護者の母語を話すことができる人がおり、通訳もするという。また、パックのなかに入っている地域の資料には、いくつもの言語に翻訳されたものが用意されており、英国に住む多民族への言語の問題への配慮が行き届きているという。[4)]

このような背景のある英国では、国民の識字率向上が常に課題であった。その識字率向上の策として、ブックスタートが注目をあびるようになる。1998年バーミンガム大学が実施した調査によると、子どもたちが小学校に入学した際に受ける基礎学力テストの点数を比較したところ、ブックスタートを体験した子どもとそうでない子どもの学力の差があったというものである。ブックスタートを受けた子どもたちは、9科目すべてのテストにおいて、高い得点を得た。研究者がとくに注目したのは、読む・書く・話す・聞くという言語的な能力を図る科目だけでなく、計算・図形認識・空間把握といった数学的な能力を図る科目においても優れていた。[4)]

そして、調査の結果を数値化し、ブックスタートで、絵本の時間をもてば、赤ちゃんの知的能力が発達するというアピールが生じ、ついにブックスタートの効果が、英国の抱えている識字率向上につながるとの認識が広がっていくのである。

視察団はここへきて、英国のブックスタートが、あまりに教育的効果を強調しているのに違和感を感じはじめる。しかし、視察団は、英国が抱えている識字率向上へ向けての方策がブックスタートにつながったことについては、理解し、納得している。そこで、これらの視察をもとに、わが国においてもぜひブックスタートを実施すること、その際には、英国の活動を日本の社会に合わせて柔軟に変化させることを提案することにした。

その内容は、英国のように赤ちゃんの教育的側面を前面に出すのではなく、英国のブックスタートが発祥した初期の理念をもとに取り組むことにした。つまり、Ｓhare books with your baby ！（赤ちゃんと絵本を介して楽しいひとときをわかちあおう）の言葉のとおり、本を読むという行為により、生まれてくる楽しくあたたかい時間をすべての赤ちゃんに届けることを目標としたわが国のブックスタートが誕生するのである。

３．４　今後の課題　父親の読み聞かせ

わが国のブックスタート運動は、前項で述べたように英国バーミンガムでの実践から学び、わが国独自の方法で、繰り広げられ、多くの自治体が取り入れ、実施されている。

保健センターでの乳健診等の会場で、地域に生まれ

たすべての赤ちゃんに絵本を手渡すという画期的なブックスタート運動は、絵本をただ配るのではなく、赤ちゃんと絵本を開く楽しい体験により、母親、父親に子育ての楽しさを伝えてくれ、子育ての原点にもどらせてくれるものである。

では、実際にブックスタート事業を体験、利用した人はどのような評価をしているか、筆者が出会った吹田市の市民講座や子育て支援講座などの受講者にその感想を聞いた内容をここで紹介する。

①ブックスタートで『いないいないばあ』の絵本を知った。子どもによく読みました。ブックスタートで配布してもらったおかげで、絵本の楽しさを実感し、子育てに役立てました。（父親）

②赤ちゃんに絵本が適しているのかよくわからなかったが、ブックスタートで頂いた絵本を、よく読みました。子どもも絵本への関心を示したので、それをきっかけに図書館で絵本を借りるようになりました。（母親）

③今もわが家には保健所の健診時に頂いた『いないいないばあ』の絵本があります。よく絵本を子どもに読みました。今子どもは小学生ですが、ときどき、絵本を見ています。（父親）

吹田市のブックスタートでは、松谷みよ子の『いないいないばあ』の感想が多く寄せられたが、その他の絵本では、安西水丸の『がたんごとんがたんごとん』まついのりこの『じゃあじゃあびりびり』などがあげられた。

これらの感想、評価を筆者なりに分析してみる。

①と③が父親の感想、評価である。①の父親、③の父親とも、『いないいないばあ』の絵本を子どもによく読まれたのだろう。その光景が目に浮かぶようである。①の父親はブックスタートで配布してもらい、はじめて『いないいないばあ』の絵本に触れられたのだろう。いろいろな動物が目隠しで登場し、いないいないばあと唱え歌のように声を出していくと、動物の生き生きした表情が現われるこの絵本に触れ、父親自身が絵本の楽しさを実感され、子どもに絵本を読み聞かせをするようになられたのだろうと推察する。絵本の読み聞かせを父親が自ら進んで行うぐらいになれたのなら、母親の育児の軽減にもつながるし、父親も子育てを担当するパートナーの意識が醸成される。①の父親は子育てに役立てたとしているので、絵本を読むことを続けられたのだと確信する。また、③の父親は、①の父親と同様に『いないいないばあ』の絵本を読んだ体験をもち、その絵本を大切に扱っているのがうかがえる。また、小学生になった今でも、子どもが絵本を見ている姿をきっちりとらえている。きっと子どもが『いないいないばあ』の絵本を見ている様子に父親として子どもの成長を振り返られているのだろう。

このように①、③の父親の感想、評価から、筆者が常に願っている父親の子育てへの参加が浮き彫りになってくる。もちろん絵本の読み聞かせは母親がしても、父親がしても構わない。日ごろ忙しい父親にはなかなか実践は困難かもしれないが、絵本の読み聞かせはミルクを与えたり、おむつをかえたりするより、より、父親に向いていると筆者は常に考えている。何の準備もいらない。ミルクを作ることひとつとってみても、最低限の知識や技術がいるし、ひとつ間違えると、ミルクの量や温度の加減で、赤ちゃんが飲みにくい状況に陥ったり、手際よく準備できず、赤ちゃんにも母親にもいらだちを覚えさせる場面も想定できる。おむつの交換も同様である。絵本の読み聞かせは、目のまえに絵本があれば、ページをめくりながら、赤ちゃんの反応に応じて、話しかけることができる。同じ本を読み続ける楽しさ、また、次には別の絵本を読んでみようと大人が“絵本探しのわくわく感”を体験する。父親としても楽しい絵本の読み聞かせの時間が生まれてくる。筆者は以上のような思いを強くもっており、機会あるごとに家庭における父親の絵本タイムを勧めている。

では、②の母親の感想、評価については、立派な母親であると感じる。正直なところ、赤ちゃんに絵本を読むといっても、本当に理解するのか、絵本を喜び楽しんいるのかわかりにくい。まだうちのあかちゃんには早いのではないかと思う気持ちはだれでももつものだろう。英国のブックスタートでもその声は多くあり、担当者が根気よく説明していった経過があったという。しかし、この母親は子どもの反応をよく観察し、子どもが関心を示したので、それをきっかけに図書館に足を運ぶようになった。乳幼児期の子育て真っ最中の家庭で、図書館に通うことはなかなか困難なことであると考える。わが国の図書館では、まだ、赤ちゃん連れの利用者に理解を得にくい状況がある。しかし、図書館には、家庭では用意できない多くの質の高い絵本や児童書がある。それらのなかから、赤ちゃんが喜びそうな絵本を選び、借りる。この過程はさきほど述べた“絵本探しのわくわく感”と同様のものである。

前述の英国への視察団によると、英国の図書館の充実はすばらしい。わが国の図書館は、英国の図書館と比較すると、まだまだ量、質とも低い。今後は図書館

の充実を図り、赤ちゃんを連れての図書館通いが頻繁にできるように、他の利用者の理解や協力を得ながら、ぜひ、多くの親子が図書館で、多くの優れた絵本と出会うことができる工夫がほしい。

以上、筆者なりにブックスタートの利用者からの感想、評価を分析した。①③は、父親の積極的なブックスタートとの関わりを推奨するものであり、②はわが国の図書館の充実を訴えるものであり、筆者が考えるブックスタートの課題として重要な視点と考えるものである。

４．子どもと絵本の読み聞かせ

４．１　絵本の言葉

１節でわが国の戦後の絵本の歴史について述べた。歴史をたどっていくと、１冊の絵本を子どもに手渡すためにどれほど多くの先駆者たちが熱い思いを込め、さまざまな手法を駆使し、取り組んできた経過が明らかになってきた。では、ここで、改めて子どもにとって絵本とはなにか、絵本のもつ役割について再考してみたい。松居直著の『絵本とはなにか』[3]　のなかで、は絵本と言葉の関係について、次のように定義している。

“絵本とは、言葉の湧き出てくる世界です。絵本は子どもに生きている歓びを感じさせ、生きる力を与えます。同時に大人をも生きかえらせてくれる言葉の泉です”とし、なかでも、子どもの成長にとって、絵本の役割についてていねいに述べていて、興味深い。

人間の生存に絶対欠くことのできぬものを空気と水そして、言葉の３つのものとし、空気と水は自然の象徴であり、言葉は人類の文化の象徴であるとしている。確かに松居がいうように人間は、他の地球上に住む生物にはない３つの固有の特徴がある。直立二足歩行と道具の使用と言葉を使うことである。言葉により、人間は他者とコミュニケーションをとり、記録を残し、人類の文化を積み上げてきた。人間にとって言葉のない生活など考えられない。では、私たちはその言葉をどのようにして身につけてきたのだろう。

松居は“あなたは言葉をだれからもらったのですか”と質問をする。この質問を受けられたほとんどの人が一瞬とまどうそうだ。それは、今、何不自由なく相手と会話したり、質問をしたり、受け答えをし、新聞や本を読み、自分の感じたことを言葉で表現したりする自分がいて、それが当たり前となっているからである。つまり、私たちは、現在言葉をフル回転させ、生きており、それは「自分の言葉」「自分の言語力」の結果であると感じているからだろうと考える。そこで松居がことばをだれからもらったのかと質問されても、はて、自分は自分の力で言葉を使っているのでなかったのかと疑問をもつのではないだろうか。

しかし、私たちは、はじめから言葉を使えるわけではなかった。人間としてこの世にそれぞれの父母から、その父母の赤ちゃんとして誕生し、そこから生命と言葉を頂いてくる。

これは、人類が地球上に誕生してから今日まで営々と続けてきた親子の絆であり、親から子へと世代をつなぐ役目でもあった。その言葉を今、親から絵本をとおして赤ちゃんがもらう。

４．２　ドロシ・バトラーのあかちゃんの本箱から

1925年、ニュージーランド・オークランド市で児童書専門店を経営し、児童文学者として、『赤ちゃんの本箱』[5]など多くの子どもの絵本についての書籍を著したドロシー・バトラーも松居と同様に、絵本と言葉について彼女の代表作『あかちゃんの本箱』で次のように述べている。

“言葉は他のどんな道具よりもすぐれた、学習を助ける道具であるということです。ちょっと考えてみただけでもすぐおわかりでしょうが、人間とほかの動物を区別するのは、まさに言葉をあやつることができるかどうかだからです。抽象的な思考は人間にだけ可能なのです。～もし思考が言葉にたよるのであれば、ある個人の思考の質は、その個人の言葉の質に大きく依存するというわけです。学習と知能に関する限り、言葉はそのもっとも大事な役割を果たすと言えましょう。子どもはどうやって言葉を覚えるのでしょう。子どもは生まれた時から、聴覚に障害をもたない限り、言葉を耳にして生活をしています。それと同時に子どもは自分で勝手なおしゃべりもします。ククーとか、ムニャムニャとかいう声は人の赤ちゃんに特徴的なことなのです。それらの音は自分の感情を表現する方法でもあるし、他の人に自分の必要とすることがらを伝える手段でもあるのです。これらの幼い音は後に、その子どもの言葉となる基礎ですし、同時に意志の疎通の最初の試みでもあるのです。早ければ生後数週間、あるいは、１か月ぐらいで、乳児は身近で語られたやさしいひびきの言葉に反応します。この感情に即した反応は、言葉に関する研究で得られた結論で、大変重要視されています。子どもはおとなとの交流で言葉を覚

えていくのですが、とくに子どもにいちばん身近なおとなとの親密なやりとりがあれば、さらに急速な進歩をみせるのです。このおとなは子どもの母親とは限りません。子どもとのふれあいをのぞみ、子どもを愛している人で、そのおとなと言葉で交流することが、お互いの喜びとなるような関係であればよいのです。このようなあたたかい交流のなかでこそ、子どもは言葉の使い方をまなんでいくのです”

ドロシー・バトラーのこの言葉は、松居の言葉同様、人間にとって、言葉が、人間の感情、感性、心の動きなどを司る最も基礎的なものであり、そこから人間は考え、工夫し、自分の思考をとらえていくものであることを説き、それを子どもに渡すのが、母親または、子どもを愛するおとなであると確信している。

ドロシー・バトラーは、自分の孫クシュラが染色体異常のため、身体的に大きなハンディキャップを持って生れ、そのクシュラのために言葉を伝える、言葉を送る、言葉を渡すということを140冊の絵本を通して、実践したという体験がある。そして、なんと、クシュラは絵本との出会いを通して、障害を乗り越えて成長していくのである。『クシュラの奇跡』というタイトルでまとめられた書籍は、児童文学や絵本を研究する人たちにとって衝撃的なものであった。そんな彼女が『あかちゃんの本箱』で説いた言葉への思いは、気高い。

４．３　絵本は子どもへ大人が読むもの

さて、松居の定義に戻ると、「幼児に限らず子どもにとって、絵本は読む本ではありません。読んでもらって耳からことばを受け入れる本です。絵本は子どもに読ませる本ではなく、おとなが子どもに読んであげる本だということをなんとしても基本に考えたいのです」（筆者下線）

松居が“なんとしても基本に考えたい”と述べた思いを子どもにかかわるすべての人がしっかり受け止めなければならない。つまり、絵本とは、親や子どもにかかわるすべての人が心をこめて、子どもに読み聞かせをするものである。それをなんとしても基本に考えなければならないと松居は説くのである。

また、さらに松居は次のようにも述べる。

“また、読んであげる本だからこそ、絵本は子どもにとって貴重な存在だといえるのです。”“なぜなら、絵本の読み手の多くは、母親あるいは父親です。あって欲しいのです。幼児のことばの体験は種々さまざまな面がありますが、親との日常生活でのやりとりで使われる日常生活的なはなし言葉の体験、テレビやラジオを通してする言葉の体験、そして絵本を読んでもらったり、昔話を聞かせてもらったりすることを通しての言葉の体験があります”[3]とし、絵本によることばの体験は前者の２つの体験に比べて、優れた芸術的な映像となり、言葉を伴って子どもに与えられるものだとしている。

そして、幼児が絵本を読んでもらうときの環境をとくに重要であるとし、“母親あるいは父親が絵本を読んであげるという行為のなかには、両親の積極的な姿勢、子どもに向いている姿勢があります。またその場合の絵本の言葉は両親の声と言葉として子どもの耳を通して内面の世界へ入ってゆきます。絵本の物語は、作者が語っているのではなく、両親が語ってくれたものとして子どもの心に定着してゆきます。この点を重視すべきです。子どもにとっては、作者はほとんど意識されません。むしろその絵本を読んで聞かせてくれた人の印象は強烈であり、絵本の内容は読み手の伝えたもの、読み手のものとして子どもに影響してゆきます。すぐれた絵本を読んであげるということは、読み手はそのすぐれた内容を自分のものとして子どもに伝える特権をもつということです。”としている。

ここに、松居が絵本が果たす役割として最も重要であるととられていることが述べられている。

子どもにとって、とくに両親から絵本を読み聞かせをしてもらうという行為は、絵本を通して、両親から、子ども自身に向けられた愛情や慈愛を受けとり、それを心の基地にどんどん蓄え、両親への信頼関係を深めていくという子育てのなかで、最も建設的な、行為であると言っても過言ではない。

子どもたちの人生のはじめに出会うはじめての本・・・それが絵本であり、それを子どもに読む両親または、それにかわる人が読み手になり、読み手から語られたお話で子どもが絵本の世界に入っていく。すなわち、子どもが読み手としっかりつながっていくものである。

４．４　絵本を読んでもらう子どもの気持ち

さらに松居は絵本を両親に読んでもらっているときの気持ちをこのように語っている。“それは子どもにとってなによりも幸せなひとときでしょう。両親が絵本を読んでくれるということだけでも子どもは喜びであるのに、その絵本がおもいしろければ喜びはもっと大きいのです。そんな子どもは安心して語り手に心を開いてくれます。子どもがもっともっと心を開き、警

戒心なく耳をかたむけているときに、私たちのことばは生き生きと深く子どもの気持ちに吸い込まれてゆくはずです。それが人間に語るという行為ではないでしょうか。”[3)]

この文章に触れると、父親または母親がじっとわが子をみつめながら、わが子への愛情や慈愛をいっぱいにしながら絵本を読み進める光景が目に浮かぶ。子どもの真剣なまなざしは、絵本の絵を追い、そして、全神経を集中させながら、読み手から発せられる言葉に聞き入っている。

両親の声、両親の口から聞こえることばは、いつも一緒に生活しながら聞いている慣れ親しんだ声ではあるが、絵本を読んでもらうときは特別な面持ちがある。子どもにとって絵本を両親から読んでもらう体験はなにものにも変えがたい、至福のときである。その至福のときが自分の好きな物語やお話であれば、さらにその思いは強くなる。このように考えていくと、絵本と子どもの出会いは、両親への信頼をも育むすばらしい体験となることということをしっかり認識したいと考える。

４．５　絵本を語る意識をもつ

松居は、絵本の読み聞かせをするときの読み手が心がける点として次のように述べている。“たしかに私たちおとなは絵本を子どもに読み聞かせるのではあるけれど、考え方としては読み聞かせではなく、「語る」のだと認識したいものです”[3)]（筆者下線）

ここで松居がいう「語る」という点に注目をしてみたい。「語る」という意味は、技術的な意味あいが感じられ、読み手にとっては抵抗感を抱く人がいるかもしれない。しかし、読み聞かせは、子どもに絵本を読み、聞かせることである。おとな自身が自分の楽しみに自分に向かって読むという行為ではない。目の前の子どもに読み聞かせるのである。子どもたちは、読み手から発せられる声の響きに耳を傾ける。そのときどきによって異なる抑揚やリズム、強弱、速さ、ときには“沈黙の間”もあり、登場人物の会話や心情、風景の描写などが読み手の声から子どもたちの心に伝わってくる。このときに、読み手であるおとなが事前にその絵本を読んだり、またはじめて読む絵本であったとしても、描かれている内容に心を動かされ、感動していると、おのずと読み手の心は相手つまり子どもに響くものが大きい。

松居はそれが訴えたかったのではないだろうか。だからこそ、ただ読むだけでなく、絵本を語ってほしいと言い切ったのだと考える。その「語る」ということは技術的なことではなく、読み手が、自分が感動した絵本、その絵本のおもしろさ、楽しさ、悲しさ、くやしさ、怒り、恥ずかしさなどを子どもたちが読み手と一緒に味わってほしいという気持ちをもって、読み聞かせをしてほしいという願いを込めたのだと筆者は解釈した。

松居は次のように「語る」について、言及した。“絵本は単に読み聞かせるのではなく、その内容に共感し、感動し、興味を感じて、心から語る場合、聞き手にもっとも内容が伝わるものです。語り手が感動し、共感している絵本は、語り手がよく理解し、心のなかに豊かにイメージを描き出している場合です。語り手のなかに豊かなイメージができ上がっているほど、聞き手の方にそれは伝わり、聞き手の理解を深め、感動や共感を呼びおこします。」これは語り手と聞き手の基本的関係です。語り手の形象化の質と度合いはきわめて大切です。このことは幼児の読書経験のポイントです”[3)]

４．６　授業のなかでの読み聞かせ

絵本の役割について松居が力説する絵本の役割については、筆者は保育士養成に関わる授業のなかで、学生へ繰り返し、伝えている。

とにかく、絵本は大人から子どもに読んであげるものであること、読み手の感動を絵本を通して伝えること、子どもは読み手その人から絵本の楽しさを味わっていること、すでに絵本作家はそこにはいない。読み手と子どもとの心の結びつきであることを学生に理解してほしいと願っているので、そこは一番強調する。

授業をとおして、学生は絵本の役割を理解したうえで、自身の読み聞かせの技術を習得し、学生同士で読み聞かせを練習したり、実際に金蘭おやこクラブ[※3]の際に子どもたちに絵本を読み聞かせを体験したり、インターンシップや保育実習などで、実技として、絵本の読み聞かせを実施している。

実際の体験を通して、子どもにとっての絵本とはなにか、おとなが子どもに絵本を読み聞かせをする意味について、理解を深めている様子がみてとれる。ここでは、2009年の児童学科１年生に行った「保育学」の授業で、学生が自分で選んだ絵本を全学生の前で読み聞かせをするというテーマに取り組んだ事例を紹介する。

まず、学生が取り上げる絵本名となぜ選択したのかその理由も述べる。絵本の種類は多岐にわたる。赤

ちゃん絵本、昔ばなしの絵本、創作絵本、翻訳絵本、シリーズもの、いわゆる絵本の定番として扱われているものなどさまざまであった。

『さっちゃんのまほうのて』、『パパおつきさまとって』、『ノンタンあそぼー』、『はらぺこあおむし』『きょうはなんのひ』、『ぐりとぐら』、『すてきな三にんぐみ』、『そらまめくんのべっど』など。

選んだ理由としては、①自分が好きで、子どものときから親しんでいたから②絵が好きだったから③ストーリーが美しく、癒されるから。④作者が好きで、他の作品も興味をもっているからなどが多かった。

学生は、緊張した面持ちで絵本を持ち、読み聞かせを始める。とくに気をつけることとして、授業で実践する絵本の読み聞かせは、保育所や幼稚園での絵本の読み聞かせを想定しており、子どもに１対１で読む場合とは違うことを認識し、多くの子どもによく見えるように、また、よく聞こえるようにする。そのために絵本を自分の胸の前でしっかり固定し、不安定な持ち方をしないようにする。顔はときどきあげて子どもたちの反応を見る。ページのめくり方にも気を配り、テンポのよいときは、早めに、ゆっくり進めるときがよいときは、ゆっくりめくるなど、事前に何度も自分で音読をしておくことなどがある。なかには、緊張し、声が小さく、聞き取りにくい学生もいるが、何度も事前に練習してきた学生も多く、しっかりとした口調で、堂々と読んだり、登場人物により、声の調子をかえたりし、自分なりの絵本のとらえ方を伝えることができる学生もいる。

そして、一人ひとりの学生の読み聞かせが終わると読み手に対して、読み方の感想などを学生同士が伝えあうようにしている。ここでの学生が伝えるメッセージは、読み手に対して、ねぎらいや励みになるものも多いが、また、ページのめくり方が早すぎる、声が小さい、絵本の持ち方が不安定であったなど手厳しいものもある。

学生たちが持参した絵本は、ハードカバーものが多く、最近学生が購入したものが多かったが、ある学生は、ペーパーブックのずいぶん古いものを持参していた。この古い絵本はその学生が子どものときに大好きになり、何度も何度も母親から読んでもらい、小、中、高校生と成長してからも読み続けていたという。
思い出の絵本として、取り上げられたのは、『おじさんとみち』（作　赤川明　出版社　チャイルド社）である。

ストーリーは、簡単である。人が歩くのに必要な道、車が走るのに必要な道が主人公となっている。そして、道が主人公という想定も愉快であるが、その道はあるおじさんが大好きで、おじさんにとことことついていく。その道はおじさんを追いかけて、どんどん進んでいく。おじさんが困ろうが、疲れようが、とにかく、おじさんを追いかける。家のなかでも構わない。道に追いかけられるおじさんはなんとなく、楽しそうという物語である。

道が主人公になるとはなんとも奇想天外な物語であるが、作家の赤川明の絵本作家としての第１作目であり、この第１作目のナンセンスさがおもしろく、子どもたちに受け続け、その後ナンセンス絵本作家として、現在も幅ひろく多くの絵本を描いている。

『おじさんちみち』を連想させる『おじいさんとうみ』、ラーメンが川になって流れる『ラーメンのかわ』『アイスクリームがとけちゃった』など多くの作品が輩出されている。

何回も読み続けられた『おじさんとみち』の絵本。古びたそのペーパーバックの絵本はその学生の成長記録として、ほかの多くの絵本のなかで、一段と輝かしく誇らしげに見えた。

※３　金蘭おやこクラブ

千里金蘭大学の児童学科で実施している地域活動プログラムのひとつ。１年生が地域の親子とふれあい、保育の体験学習を行う。

４．７　保育のなかでの絵本

このように、この章では絵本の役割について述べ、実際に絵本の読み聞かせの実践も紹介してきた。これらを論じられるという根底には、前章で述べたわが国の絵本の発展の歴史があり、この歴史を支えた多くの絵本の研究者たちからの提言が大きく影響している。

先駆者の絵本に対する熱情、造詣の深さがわが国の絵本の発展を支えてきたが、絵本の発展とともに歩むべきであった保育の現場の絵本の扱い、絵本の読み聞かせについては、外国のそれと比較すると、研究が進んでいないのが現状である。ここで、松居直が述べた『保育と絵本の関係』から紹介したい。

松居はわが国の保育現場では、今までは、戦争の影響もあり、絵本そのものの研究に乏しかった経過を述べている。

戦前の絵本研究にもっとも欠けていた点は、外国の絵本の歴史を正しくとらえて、絵本の発生と成立、発展をとおして、絵本の本質を確認しようといった方面の研究がなされなかったということであるとしている。

とくにコールデコット※4以来の近代的な絵本の歴史、その一冊一冊の分析は、子どもと絵本のつながりを知り、その意義を理解する、良い方法であるとし、西欧諸国における絵本の評価基準をおおいに参考にする必要があるとしている。

それらの研究は、調査、研究にあたる人が、一冊一冊の絵本に対する、いろいろな子どもの反応を確かめ、記録し、きわめて個別的な調査の積み重ねを総合して、一つの傾向を知るものであり、そこには、絵本のことだけでなく、子どもの文学やさし絵に関してもしっかりとした知識をもっていなければならないと明言している。

西欧諸国の絵本の発展はそうした絵本の本質を理解し、より良い絵本を子どもに与えようとする絵本の厳格な批評ができるひじょうに豊富な経験と知識をもった専門家がいるからだとしている。

※4　コールデコット
19世紀の絵本の巨匠、ランドルフコーデコット。16冊の木版色刷絵本を残した絵本作家。
1937年以降、米国でコールデコット賞が設立された。

5. まとめ

今回ブックスタートと絵本をテーマに述べてきたが、最後に赤ちゃん絵本を読み聞かせながら、子育ての楽しさを広げるブックスタートの今後の発展と充実を期待しながら、ひとつのエピソードを記してまとめとしたい。それは前述の松居直が2002年12月にＮＨＫ教育講座で語った『絵本のよろこび』[6)]のなかの一説である。「赤ちゃんも絵本をたのしめる」というテーマで語られている本文から引用する。

松居氏はあるとき、絵本に関心をもっている知人から、とても楽しく考えさせられる便りをもらったという。その知人の姪ごさんに男の赤ちゃんが生まれ、2か月未満になった。たまたま松居氏がＮＨＫのラジオ番組で「ブックスタート」について話したのを聞いた知人はその話を姪に伝えたという。

その内容は、“「赤ちゃんにとっても絵本は大切である。ただし読んであげるのではなく、また絵本を与えるといった発想でもなく、絵本を開いて赤ちゃんと一緒に挿絵を見て楽しみながら、自然に口からもれる声の言葉で、自由に話しかけたりすることが望ましい。赤ちゃんは大好きな“お母さんの声”を楽しみながら、共にいる歓びをわかちあうことこそ、親子二人にとって最高の幸せなのだから」といった趣旨であった。これを聞いた姪は、自分がその２か月未満の子どもに絵本を読み聞かせしたときの反応を話した。その赤ちゃんはとてもうれしそうにするという。そのときそのお母さんが読んだ絵本はおよそ、赤ちゃん向きとはいえぬ、お母さん自身が大好きな『三びきのやぎのがらがらどん』だった。お母さんは赤ちゃんの横にごろんと寝ころがり、赤ちゃんに絵がよく見えるようにしてゆっくりと読みはじめると、赤ちゃんは絵本の画面に集中して眼が輝き、身体中でいろいろと反応した。お母さんが「おしまい」というと、両手両足をバタバタさせて、もう一度といって催促をしている様子である。そこでお母さんはまた同じ絵本をゆっくりゆっくりと読みはじめると、小さい眼をパッチリと開けて、おとなしくじーっと聴いている。こうして毎日、何度も何度も小一時間ぐらい読んであげると、とにかく喜ぶのである。

『三びきのやぎのがらがらどん』をこうして繰り返し読んでいるうちに三びきの山羊がそれぞれ橋を渡る場面になり、小さい山羊が橋を渡る「かたこと　かたこと」という音を耳にすると赤ちゃんは足をバタバタさせ、つぎの中くらいの山羊の「がた　ごと　がた　ごと」ではもっと足をバタンバタンと動かし、最後の大きな山羊の「がたん、ごとん、がたん、ごとん」となると両手と両足をバッタンバッタンさせるようになった。その様子を確かめにいった知人は、生後たった２か月足らずの乳児の言葉を聴きわける力と集中力と表現力とに眼を見張る思いだった”という。

この話を聞いて、松居氏が考察し、述べた言葉を次に紹介する。これは、筆者がこの論文で最も主張したかったブックスタートの果たす役割と絵本の奥深さをあらわしている。

「この新米のお母さんはおそらく、『三びきのやぎのがらがらどん』という絵本が好きで、物語をゆたかに感じ取り、読みとっていき、気持ちをこめていきいきとした語り方をしていたに違いありません。口で語られる声の言葉には、読み手の息づかいや気持ちがこもり、言葉が生きて働くものであることは、すでにお話しました。お母さんが楽しみながら、同じ本をゆっくりと繰り返し読んでくれることは、乳児にとって最高の言葉の体験です。わかるわからない以前のこうした声の言葉、愛の言葉を耳にすることこそ、赤ちゃんの、ひいては私どもの人生における最初のすばらしい言葉との出会いであり、人と人との交わりの出発店でありましょう。赤ちゃんはこうした言葉をとおして、お母さんの気持ちを感じ取り、その表情を読みとるこ

とをも知るのです」

筆者も『三びきのやぎのがらがらどん』の絵本に魅せられた一人である。北欧の民話をもとにアメリカの画家マーシャ・ブラウンが渾身の絵を描き、瀬田貞二が訳している。筆者が保育現場にいたときに、この絵本に出会い、当時受け持っていた５歳児の子どもたちに何度も読み聞かせをした。

子どもたちの集中力はすばらしく、絵本のなかのがらがらどんとトロルの出会う場面を再現し、子どもたち自らがヤギ役とトロル役になってごっこあそびを展開させていたのよく覚えている。それを年度末に行う生活発表会でオペレッタにアレンジして、取り組んだ。保育士として忘れられない貴重な体験である。

筆者にとっても忘れられない絵本である『三びきのやぎのがらがらどん』が生後２か月未満の赤ちゃんに受け入れられ、母親と赤ちゃんとを結ぶ絆になっていることは大変喜ばしいし、感動させられる。そして、松居氏が述べた前述のコメントは、絵本を愛して止まない松居氏の心がにじみでたものであり、松居氏から絵本づくりや出版など絵本にかかわるすべての人、各地でブックスタートに取り組む人、子育て中の父親、母親、また子育てを支援するすべての人々へ贈られた熱いメッセージとしても受け止めることができる。真摯に受け止めたい言葉である。このメッセージを忘れることなく、これからも保育士、幼稚園教諭として絵本の読み手になる学生への指導を進めていきたい。

【引用文献】

(1)『瀬田貞二子どもの本評論集絵本論』福音館書店　1985年
(2)『岩波の子どもの本』岩波書店1953年
(3) 松居直著『絵本とはなにか』　日本エディタースクール出版部　1973年
(4)『赤ちゃんと絵本をひらいたら』ＮＰＯブックスタート編著　岩波書店　2010年
(5) ドロシー・バトラー著 横山真佐子訳
『あかちゃんの本箱０歳から５歳の絵本』ブック・グローブ社　1989年

【絵本】

『ふしぎなたいこ』石井桃子作　清水昆絵　岩波書店　1953年
『かにむかし』木下順二作　清水昆絵　岩波書店　1959年
『きかんしゃ　やえもん』阿川弘之作　岡部冬彦絵　岩波書店　1959年
『ひとまねこざる』ハウス・アウズスト・レイ著　光吉夏弥訳　岩波書店　1954年
『はなのすきなうし』マンロー・リーフ作　ロバート・ローソン絵　光吉夏弥訳　岩波書店　1954年
『ちいさないえ』バージニア・リーバートン著　石井桃子訳　岩波書店　1954年
『まりーちゃんのひつじ』フランソワーズ著　与田準一訳　岩波書店　1956年
『赤ずきん』グリム作　バーノディット・ワッツ絵　生野幸吉訳　岩波書店　1976年
『おかあさんだいすき』マージョリー・フラック作　大沢昌助絵　光吉夏弥訳　1954年
『こどものとも』福音館書店1956年〜現在に至る
『キンダーブック』フレーベル館発行　保育絵本　1927年〜現在に至る
『チャイルドブック』チャイルド社　保育絵本
『ひかりのくに』ひかりのくに株式会社　幼児向け月刊を発行　1946年〜現在に至る
『ビップとちょうちょ』与田準一作　堀文子絵　福音館書店　1956年
『はじめておつかい』筒井依子作　林明子絵　福音館書店　1974年
『ぞうくんのさんぽ』なかのひろたか作・絵　福音館書店　1968年
『だるまちゃんとかみなり』加古里子作・絵　福音館書店　1968年
『いちごばたけのちいさなおばあさん』わたりむつこ作　中谷千代子絵　福音館書店1971年
『やっぱりおおかみ』）ささきまき作・絵　福音館書店　1971年
『よるのびょういん』谷川俊太郎作　長野重一写真　福音館書店　1977年
『たろうのおでかけ』村山桂子作　堀内誠一絵　福音館書店　1963年
『ぐりとぐら』中川李枝子作　大村百合子絵　福音館書店　1962年
『こすずめのぼうけん』ルース・エインワース作　石井桃子訳　堀内誠一絵　福音館書店　1974年
『ぐりとぐらのかいすいよく』中川李枝子作　大村百合子絵　福音館書店　1974年
『こうさぎのクリスマス』松野正子作　荻太郎絵　福音館書店　1974年
『くらやみえんのたんけん』石川ミツ子作　二俣英五郎絵　福音館書店　1980年

『さんまいのおふだ』新潟の昔話　水沢謙一再話
梶山俊夫絵　福音館書店　1977年
『てんさらばさら　てんさらばさら』わたりむつこ作
ましませつこ絵　福音館書店　1980年
『三びきのやぎのがらがらどん』マーシャ・ブラウン作・絵　瀬田貞二訳　福音館書店　1965年
『スイミー』レオ・レオニ作・絵　谷川俊太郎訳
至光社　1969年
『どろんここぶた』アーロルド・ローベル作・絵
岸田衿子訳　文化出版局　1971年
『かいじゅうたちのいるところ』モーリス・センダック作・絵　神宮輝夫訳　冨山書房　1975年
『うみのおばけオーリー』マリー・ホール・エッツ作・絵　石井桃子訳　岩波書店　1974年
『まっくろネリノ』ヘルガ・ガルラー作・絵
やがわすみこ訳　偕成社　1973年
『３びきのくま』Ｌ・Ｎ・トルストイ作　バスネッツオフ絵
小笠原豊樹訳　福音館書店　1962年
「ロバのシルベスターとまほうの小石」
ウイリアム・スタイグ作・絵　瀬田貞二訳　評論社
1989年
「すてきな三人ぐみ」トミー・アンゲラー作・絵
今江祥智訳　偕成社　1969年
『おたまじゃくしの101ちゃん』加子里子作・絵
偕成社　1973年
『おしいれのぼうけん』、古田足日作　田畑精一絵
童心社　1980年
『いない　いない　ばあ』松谷みよ子作　瀬川康夫絵
童心社　1967年
『がたんごとん　がたんごとん』安西水丸作・絵
福音館書店　1987年
『じゃあじゅあびりびり』まついのりこ作・絵
偕成社　1983年
『さっちゃんのまほうのて』たばたせいいち作・絵
偕成社　1985年
『パパおつきさまとって』エリック・カール作・絵
もりひさし訳　偕成社　1986年
『ノンタンおやすみなさい』キヨノサチコ作・絵
偕成社　1976年
『はらぺこあおむし』エリック・カール作・絵
もりひさし訳　偕成社　1976年
『きょうはなんのひ』瀬田貞二作　林明子絵
福音館書店　1979年
『そらまめくんのべっど』なかやみわ作・絵
福音館書店　1999年
『おじさんとみち』赤川明作・絵　チャイルド社

【参考文献】
『おじいさんがかぶをうえました―月刊絵本「こどものとも」　50年の歩み』　福音館書店　2005年
『子どもたちと絵本』長谷川摂子著　福音館書店
1988年
『えほん　こどものための500冊』　日本子どもの本研究所編　一声社　1989年
『家庭教育ノート』文部省
『子ども・子育て応援プラン』厚生労働省　2005年
『父親力』正高　信男著　中公新書
『クシュラの奇跡』ドロシー・バトラー著 百々佑利子訳　のら社　1984年